袈裟に供養する？

十月一日は、「更衣」の日です。平安時代、宮中で、年に二回、四月一日に「着物の袷から単衣」へ、十月一日は「単衣から袷」へと替えていたのがこの言葉の起源となっています。しかし、まだまだ暑さは残っていて夏服も片付けることができないでいます。私たち僧侶も袈裟を着替える時期なのですが…。

ところで、その袈裟に関するお話をします。私たちがある人を嫌いになり、憎みはじめると、その人に関連したなにもかもが嫌いになり、逆に、恋人の持ち物に対しては、まるで恋人その人に対したかのような感情を持ちます。それが、古来「坊主憎けりゃ袈裟まで憎い」といわれてきたことわざです。

また、袈裟については、こんな話もあります。一休禅師のエピソードです。京都の商家で盛大な法要があり、その導師に一休禅師が呼ばれました。一休禅師は気軽にその役目を引き受けます。その後、どこからか汚らしい着物を見つけてきて、手足に煤をつけ、菰をかぶってその商家へ行ったのです。そして、玄関から中に入ろうとしました。びっくりした家の主人は、「見苦しい奴じゃ。さっさと追い出せ」と、下男に命じます。一休禅師はさんざん棒で打たれて、外に追い出されました。そのあと、禅師は金襴の袈裟に身を包み、堂々と商家の門前に立ったのです。すると、主人は、「どうぞ、どうぞ」と奥へ案内しようとしました。「いや、愚僧はここで結構です」と、一休禅師は玄関を動こうとしません。「ここは下郎の座るところです。さあ、どうぞ奥へ・・・」「では、この衣だけを奥へ連れて行ってください。中味のわしは、ここから追い返されたのですから・・・」と言ったそうです。「大人げない」という意見もあると思いますが、じつをいえば、同じような話がインドにもあるのです。『大智度論』という三世紀にインドで成立した本の中に、カシミールの僧が粗末な衣で大邸宅を訪れた時、門前で追い返されました。ところが立派な衣を借りて行くと、素晴らしい供養にあずかったのです。そこでその僧は、供養の品を衣服に与えたという話があります。

インドでも日本でも、昔も今も、私たちは外見だけで人間を判断しているようです。気をつけたいものです。

（仏教とっておきの話　参照）